



## 定年退職のご挨拶

令和5年3月31日付

薬学部

医療薬科学講座創剤学分野 教授

佐 塚 泰 之

この度、令和5年3月末日をもって岩手医科大学を定年退職することとなりました。上位学年の講義を担当するため、薬学部開設1年後の平成20年4月に赴任して以来15年間、圭陵会の会員の皆様には大変お世話になり、有難う御座いました。また、薬学部のみならず、医学部、歯学部、看護学部の先生方に様々な面でご支援を頂きましたこと、事務の皆様にも陰で支えて頂きましたこと、厚く御礼申し上げます。

創剤学講座（現・医療薬科学講座創剤学分野）は、松浦誠講師、杉山育美助手の3人体制でスタートしました。当分野は、医薬品の剤形を研究・教育の基盤としており、薬学部にはかない特有の学問体系となります。かつては、物理薬剤学、製剤学と称され、医薬品開発の最終段階で医薬品の有効性を規定するものでした。しかしながら、この数十年で Drug Delivery System (DDS) がその研究基盤に加わり、これまででしたら開発初期にドロップアウトした化合物を再度開発ステージにのせたり、1日3回服用のくすりを1回服用とする徐放化や患部にくすりを集中させる標的化が可能となってきました。この分野は薬学教育、薬剤師の職能の部分でも重要になってきており、例えば、錠剤の半錠処方が出た場合、製剤添加物から分割していいかどうかを判断することが可能となります。

この物理薬剤学、製剤学、DDS よりなる創剤学において、私の研究はナノキャリアによる DDS を主体にしています。細胞の1/100 くらいの大きさの脂質二分子膜閉鎖小胞であるリポソームの物理学的特性から

生物学的有効性に関し、様々な角度から研究を行ってきました。リポソームは、粒子径、表面電位よりその物理学的特性を規定し、医薬品製造因子としてきました。しかしながら、これだけでは生物学的有効性を規定できないことを明らかにし、リポソーム表面に形成される固定水層の厚さが重要であることを示しました。この観点から、複数の polyethyleneglycol (PEG) 脂質で修飾するのが有効なこと、さらに、異なった分子量の PEG を有する新規 different double arm 型 PEG 脂質を合成し、その機能性を明確にした研究で特許を取得しております。

また、服薬時の食品成分にも注目し、緑茶のうまみ成分であるテアニンが、制がん剤の効果を増強すること、本作用はテアニンによる腫瘍細胞からの制がん剤の流出抑制に起因することを明らかにしました。同様の作用はカフェインやタウリンなどの他の成分にもあることを示しております。その他、医学部の先生方と様々な共同研究を実施させて頂き、現在では附属病院での院内処方に採用されている事例もあります。

薬学部開設4年目より9年間、薬学部学生部長を務めさせて頂きました。その任期中に起きた東日本大震災では、本学学生の安否を確認し、幸いにして被害者ゼロだったことに安堵した記憶が鮮明に残っています。皆様は、医療従事者として、この震災の経験を生かして頂けたらと思います。圭陵会会員の皆様のご多幸とご健勝を祈念して、定年退職の挨拶とさせていただきます。本当に有難う御座いました。



## 定年退職のご挨拶

令和5年3月31日付

薬学部 医療薬科学講座

薬物代謝動態学分野 教授

小澤正吾

薬学部が開設された平成19年4月1日付で任用いただき、岩手医科大学の長い歴史の中でも大きな出来事であろう矢巾キャンパス移転に伴い新築された現在の東棟に参りました。その後、医学部、歯学部が矢巾に移転、さらに看護学部新設と、令和5年を迎えた矢巾キャンパスはまさに、医療系総合大学のキャンパスとなっています。

私が担当を仰せつかった科目のうちの主だったところである、2学年の「薬物動態学1」、3学年の「薬物動態学2」は、服用、または注射により一旦薬が体内に入ってしまった後の体内の動きを解析し、肝臓、腎臓の機能などに問題を抱えておられる個々の患者さんではどうなりそうかを予測する学問分野です。薬は製造販売承認がおりて市販に至るまでに、慎重な臨床試験（治験）を経ていきます。健康成人志願者、予定されている適応症を有する患者が臨床試験（治験）に協力して下さっており、その過程で、開発中の薬の体内動態を把握します。さらに、少数ではあるでしょうが、肝臓、腎臓に障害がある方では、障害の少ない方と比較すると薬が不必要に体内に残存してしまうかどうかなど、貴重な情報が得られます。薬物動態学は、臨床試験（治験）で得られたデータを解析することはもちろん、市販後に臨床試験（治験）段階よりもはるかに多い患者に用いたときに初めて遭遇する問題の解決にも役立つと考えます。

薬学部を卒業して薬剤師となった学生は、薬物動態学の基礎理論や、臨床への応用について当然修得しているものとみなされます。実際に薬を服用、注射された患者のその後の状態を十分に把握し、問題がおこっ

た場合に適切な対策をとる能力を期待されています。そのためには経験値を高める必要がありますが、実務経験を積む以外の方策はないと考えます。

本学を定年退職するにあたって申し訳ないと思うことは、薬学部の志願者数が減少してしまっていることです。本学薬学部には、教育にいかんなく力を発揮して下さいな先生方がそろっています。志願者数の回復のためには、薬学を学ぶことの楽しさ、ならびに患者の薬物治療上の問題を解決できた時の喜びをいかにして知っていただくか、に尽きるのではないかと考えます。

社会情勢の変動の中で、薬学人気が高まった時期が確かにありました。一方で、前述のように、薬学を修めることは、一大事業で、難しさと厳しさを伴います。気後れすることも確かかもしれません。しかし、これまで本学に奉職させて頂いた16年間、どこに出してもトップクラスの医療従事者になることはまちがいない、と感じる学生が沢山いました。トップクラスの学生たちは全員が全員初めからそうだったわけではなく、薬学の特徴である境界学問、応用科学、薬学臨床の間のつながりに気づいたときに成績が急伸したようです。非常に素直な気質の多くの学生と共に学ぶことができたことや、本薬学部の教育について真剣に議論させて頂いた先生方、その基盤づくりに尽力いただいた事務方の皆様に感謝しつつ、稿を閉じさせていただきます。末筆になりますが、本学が今後長きにわたり北東北の地域医療を率いていく存在でありますことを祈念申し上げます。



## 定年退職のご挨拶

令和5年3月31日付

看護学部 共通基盤看護学講座

教授 三浦幸枝

圭陵会の先生方におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

この度、令和5年3月末日をもちまして岩手医科大学を定年退職することになりました。看護師としての39年と看護学部の教員としての5年間、岩手医科大学には、看護師としてはもとより、人として成長させていただき心から感謝しております。

私は、昭和54年、岩手医科大学附属病院に看護師として採用されました。在職中は、病棟、外来勤務の中で、慢性疾患看護を通してかけがえのない患者の人生にかかわる看護の価値、看護のあり方を考えさせられました。「慢性看護」を探求したいという思いで、平成17年に岩手県立大学看護学部看護学研究科に入学しました。主任看護師として働きながら職場の同僚や医師の協力を頂き修了することができました。その後看護師長、副看護部長、平成27年には看護部長を拝命し、「やさしさと思いやり倫理観の高い看護実践」を目標に努力いたしました。

平成30年3月、39年間務めた附属病院を定年退職し翌日より、看護学部共通基盤看護学講座の特任准教授として着任いたしました。着任数日後より成人看護学概論の授業が始まり、病をもつ成人期の対象への看護を教えることは難しいなど感じる日々でした。知識・技術を教えるだけでは看護は伝わらず、自身の今までの経験を言葉にすることで学生が看護に気づき目が輝く瞬間にやりがいを感じました。学生が、病により自立した生活が送れなくなった患者の苦悩や生活を想像したり、親よりも年上の年代の患者と援助関係を築いていくことは簡単なことではありません。しかし、

1年時からの学びや経験を積み上げ成長していく過程を見ていると、感慨深いという言葉では言い表せないほどの喜びで心がいっぱいになる経験もできました。

令和3年4月に共通基盤看護学講座の教授に昇任、看護学部学部長を拝命いたしました。臨床と教育の経験から、「看護」と「教育」共通するものがあると思います。「看護」は病気を看るのではなく病と共に生きる「人」を看る、「教育」はその学生の学習状況をだけを見るのではなく学ぶ「学生」を見る。特に臨地実習では、教員や臨床指導者が「できた」「できない」と評価すればするほど学生の関心は、患者ではなく自分自身に向いてしまいます。学生が萎縮せずに伸びやかに自分の考えを言えるような安心できる環境を整える必要があります。附属病院の臨床指導者には学生の良きロールモデルとなり、共に実習環境を整えていただきました。良い実習環境であることが岩手医科大学看護学部の強みになることと思います。

今後も、教養と深い人間愛、社会性の素養をもった「誠の人間」の育成を教員間で大切にし、患者を尊厳したかかわりという看護のありかたもそうであるように、学生個々を尊重して向き合うことで、学生も同じ姿勢で患者にかかわることができるようになってほしいと願っています。在任中に賜りました多大なるご支援に改めて感謝申し上げます。

最後に圭陵会のますますのご発展を祈念して挨拶とさせていただきます。